

CONTENTS

- 建設中の「記念館（2号館）」 1
- 学祖・長谷川良信と社会事業の先覚者たち XII 2
- 展示見学時のお願い 5
- 淑徳大学アーカイブズ日誌（2020年6月～9月） 5
- コロナ禍におけるアーカイブズの活動と対応について 6



(現在の記念館)

— 建設中の「記念館（2号館）」 —

淑徳大学創立20周年記念事業の一環として「記念館」が建設された。1985年（昭和60）3月11日に落慶式が挙行され、4日後の3月15日には第17回卒業証書授与式が記念館のアリーナで行われた。アリーナの奥には、薬師寺（奈良市）の仏像等を手がけた大川胤真仏師作阿弥陀如来坐像が安置された。記念館にはアリーナのほか武道場、音楽室、多目的教室等多様な施設があり、大学の諸行事の開催、研究や教育活動、学生の課外活動等の場として広く利用されている。

(淑徳大学アーカイブズ所蔵)

学祖・長谷川良信と社会事業の先覚者たち XII

— 実兄・長谷川善治 —

淑徳大学アーカイブズ 所長

長谷川 匡俊

このシリーズを結ぶにあたって、是非紹介しておきたい人物がいる。わが国社会事業の先覚者としてその名を列ねることには躊躇せざるを得ないが、とくに戦前期における長谷川良信の幅広い社会事業・社会活動を語るうえで欠かせないのが、実兄の長谷川善治(1888~1941)である。

後述するように、この兄弟には共通する特徴も少なくないが、その生涯は大きく異なりを見せている。仏教者であったか否かが最大の理由だと考えるものだが、それはともかく、善治の野人的な波乱万丈の生涯を彩り、その中心をなしていた活動は、明治末から大正・昭和戦前期という時代がはらむ社会問題や国難ともいべき状況に果敢に挑んでいった新聞人としてのそれであった。

善治を取り上げた研究がいくつかある。管見では、茨城県史編纂に従事していた森田美比による「茨城苦学院」の設立や「日立鉱山煙毒事件」の追及といった若き日の社会活動に関する一連の研究と、善治が社長を務めた昭和期の『萬朝報』について、彼が講談社の野間清治社長宛に送った書簡の紹介をしている荒井真理亜の論文があげられよう(掲載誌は後述の拙稿参照)。いずれも主な使用資料は、善治の著した自叙伝ともいべき『小説・発売禁止』(忠誠館書店、1926年)と昭和期の『萬朝報』である。ちなみに『萬朝報』は1892年11月に黒岩涙香の手により創刊された日刊紙で、黒岩主筆時代は業界を代表する新聞であった。後に善治は、17歳のころ、黒岩の書物を読み感動したことがあって、自ら「涙香先生の門外の門下生」だと述べている(同紙1935年1月1日号)。

近年、筆者も善治の生涯と人となりの全体像を整理し直し、併せて弟良信との関わりについていささか論及したところである(「反骨の新聞人・長谷川善治の生涯—社会運動と弟良信との関わりを中心に—」、『千葉・関東地域社会福祉史研究』第39号、2014年)。ここでは紙面の制約もあるので、主に善治の行なった社会事業や社会運動の一端を紹介し、その活動が良信に与えた影響や『萬朝報』をめぐる二人の協力関係などについて考察してみよう。ただし、二人の思想上の問題にはあえて触れていない。

はじめに善治の生涯を年譜的に素描しておこう。彼は1888(明治21)年12月、長谷川家(男6人、女1人)の四男として生まれ、良信は2歳下の五男にあたる(以下年齢はすべて数え年で記す)。94年(7歳)夏、母が7人の子を置いて家出したため、同年暮に奉公に出され、茨城県筑波郡北条町(現・つくば市)の小間物商店「塚田屋」の小僧となる(同じころ良信は茨城県真壁郡真壁町(現・桜川市)の浄土宗得生寺に入る)。96年(9歳)、長兄徳太郎夫妻も家出し、女手がなく父が病気となり帰郷。13歳のころ、1年ほど天秤棒で油の行商をして家計を助ける。

1901年(14歳)、苦学を志して東京に出奔(徒歩で上京)。新聞の売り子、大福餅販売をしながら、15歳の春、東京府立職工学校機械科夜間部に入學(生徒兼小使いとなる)。17歳、2ヶ年の課程を終え卒業。同年、東京市街鉄道の幼年信号人となり、外国に行くため大倉商業学校夜間部に入學。翌年2学年に進級。9



宗教大学在学の際の良信と善治
(良信は1910~15年まで在学)

淑徳大学アーカイブズ所蔵

月5日「日比谷公園焼打ち事件」に加わる。1906年(19歳)、浄土宗第一教校(現芝中学高等学校)に在学中の弟良信と3ヶ月ほど赤坂田町で同居。同年次兄八郎治死去(26歳)、良信と共に帰郷。長兄徳太郎死去(31歳)。7年、欧米へ密航を企て友人二人と函館に渡るが、失敗。5月中旬共に帰京。失望のあまり鬱々として半年をおくり、学業半ばにしてついに帰郷(12月)。三兄俊十郎死去(23歳)。8年(21歳)、貧家の子弟教育に情熱を燃やし、後述の「茨城苦学院」を設立し、翌年、姉(杉山ひさ)の勧めで森竹子と結婚した。

11年(24歳)、『茨城日日新聞』の記者に採用され、のち独立して雑誌『茨城万報』を刊行。「日立鉱山煙毒事件の暗黒面」の標題で本事件を追及し、演説会で刺客に襲われるなど刑事の尾行が続き、「新聞紙法」違反で罰金30円に処される。すると『かほく新聞』と改題して社長となり小型の日刊紙を発行。15年(28歳)、同志石田百壽が経営する『茨城評論』を引き受けるも、後に石田に裏切られて投獄され、10ヶ月の厳しい獄中生活を送った。この間「囚人の研究」に意を注ぐ。その後古物商、木工会社、製薬会社等を次々と立ち上げ、実業人として活躍。20年(33歳)、衆議院議員選挙(茨城一区)、翌年水戸市議会議員選挙にそれぞれ出馬するも落選。この間、善治の反官・反権力的な行動に加えて、他候補等からの策動もあり、長谷川家の家宅捜索が行なわれ水戸監獄に収監の身となる。その後守屋知事との間にも確執があり、再び検事局の呼び出しを受けた。

25年(38歳)、宇都宮で『常野毎日新聞』を発刊。26年には自伝的小説『小説・発売禁止』を世に問う。28年(41歳)、縁あって『萬朝報』の幹部(総務局長)となり、12月社長に就任。翌年から経営危機下の同社の再建に全力を尽くし、事業を拡大していく。しかし経営は思うに任せず、32年12月には上記した講談社社長・野間清治に宛て、経済的援助を求める書状を出すに至っている。34年(47歳)、萬朝報社より『維新の快拳と水戸思想』を編集刊行。35年、故郷の本戸に青年修養道場「天農義塾」を開設した。36年(49歳)、再び衆議院選挙(茨城一区)に立候補するも落選。また社業継続不能に陥り、『萬朝報』社長を辞任する。その後の経過は不確かで、41年2月24日、病のため没す。享年54歳。

このような善治の生涯のなかで、いわゆる社会事業や社会運動にあたる活動を見て行くと、青年期における義侠心に富んだ弱い立場の味方として、地を這うような最前線での事業や活動と、壮年期の『萬朝報』社長時代における言論人としての婦人・無産労働者を対象とした社会活動に分けられよう。まず前者に関しては、①貧困青少年に進学の機会を提供する「苦学院」

の設立、②日立鉱山の煙毒問題を取り上げて、その「暗黒面」を筆鋒鋭く追及した活動、③服役中に看守の叱声を受けながらも、あらゆる種類の「囚人の心理」に迫るべく行なわれた聴き取り、④水戸の大火の際、罹災民の窮状を察して多額の寄付をしたこと、などがあげられよう。

後者に関しては、30年、萬朝報社に婦人部を設けて婦人の政治的、社会的地位の解放向上に努め、婦人労働者研究会を組織して貴族富豪の婦人たちに無産大衆の家庭を知らしめるなど、ブルジョア婦人に大きな刺激を与える効果があったし、彼女らも同社の細民救済運動に参加したという。また31年、浅草区橋場町に無産者の医療機関「東京労働病院」(萬朝報診療所)を開設。さらに政府に対して、中小商工業者、農漁業関係者への融資方法の急設を提案。その他電灯料金の値下げや、水戸鉄道を解雇された従業員への補償を実現するなど、庶民大衆の立場に立って積極的に行動している。

上記のうち、ここでは20代初頭、善治の最も精彩を放っていた事業というべき「苦学院点灯事業」の一端を紹介したい。以下の引用は、「茨城苦学院第二学資生産所・新設趣意書」(『小説・発売禁止』p140)の一節である。

少年時代の者の学ばんとするには、学校の便益なるや言ふまでもなし。是れ学校教育の必要甚だ大なる所以なり。然れども我国に於ては金力なきものは学校に学ぶ能はず、為めに貧民の子弟は常に無学無能の徒として、多くは事をなせず、徒らに草莽の間に朽つ。之れ実に我が国の西洋に劣れる所以にして、慨かほしからずや。之れを救済せんとして起れるもの即ち苦学院之れなり。苦学院は貧民の子弟にして学資に乏しく中等教育を受け能はざる者に対し、一定の学資生産の事業を与へ一切の費用を給与して之れにその望む所の学校に学ばしむる所なり。

とみえる。文中の「学資生産の事業」が「点灯事業」なのだが、点灯とは、街灯がガス灯や石油ランプであったこの時代、点火して回る人を点灯夫と言い、点灯会社が雇用していた。善治はその会社を買収して点灯夫を廃し、学生が点灯夫に代わって学資を得るという発想である。当初は「無月謝学校」を建てたいと考えていたが、財力も地位も学歴もない一介の書生には困難と判断し、「苦学生」(年齢15歳以上、高等小学校卒業の者)の養育に切り替えた。しかも彼の凄いところは、時の茨城県知事坂仲輔を訪ね、水戸に「茨城県苦学院」を創立したいと直談判していることだ。その時知事は、「苦学生は奨励すべきものではないが、貴方が自己の経験に依って、世の貧学生の為めに尽されると言ふことは実に敬服する」と言って、苦学院の創立趣意書に裏書をしてくれ、即刻教育課長、警察部

長にも紹介してもらい、賛成署名を取り付けることができた。善治の社会活動の第一歩となる。なお、本事業は第二、第三、第四と学資生産所を増設し、入学実績も少しずつあげて行くのだが、経営に行き詰まり3年足らずで倒産してしまった。

* * *

ここでしばらく、同時代における善治と良信の行動を対照させながら、多少ともその影響関係を探ってみたい。善治が「苦学院」を始めた1908（明治41）年といえば、弟良信は旧制中学在学中のことで、善治が苦学院の事業を撤退する10年に良信は宗教大学予科に入学している。そしてその翌11年に善治は新聞記者として、身の危険にさらされながら、日立鉱山の煙毒事件の追及に奔走した。15年良信が大学本科を卒業し、社会事業の現場（東京市養育院巢鴨分院）で第一歩を踏み出した頃、善治は獄中生活を送っている。翌16年1月釈放され、貧困の極みにあった妻子を抱えながら再起をはかり、父兄の墓を建立して供養するほか、古物商の鑑札を受けて水戸で営業を始め繁盛したという。この頃良信は過酷な現場の労働条件のもとで病魔に侵され療養を余儀なくされるが、病小康を得て、17年には恩師・渡辺海旭が主筆を務める『浄土教報』の記者として再スタートを切った

18年3月、良信は母校宗教大学「社会事業研究室」の理事に就任するが、その1ヶ月前、東京府慈善協会第二部主査並びに巢鴨方面救済委員を委嘱され、スラム地区の生活状況の調査と対策の検討に従事することとなった。そして10月初め、「社会事業研究室実地調査部」の肩書きはあったが、単身でスラム地区への移住を決行した。場所は大学付近の西巢鴨にある通称「二百軒長屋」というところであった。一方善治はこの年、共同出資で「茨城木工株式会社」を水戸に設立、専務取締役となり、古物商は妻に任せた。また同年の水戸大火の際には被災者支援のために多額の寄付を行なっていることは先に記した通りである。翌19年1月、良信は先の「二百軒長屋」における住民との共同生活を通して「里人の生活に適応類化する」感触を得て、「一寸の思想、五分の実行を期す」と、ついにマハヤナ学園の設立に至った。善治はといえば、このころ仲間と次々と事業を立ち上げ、青年実業家として名を高めていたのである。

こうして二人を見てくると、たとえば善治の「苦学院」の事業は、やがて良信が貧困者の生活問題や児童の未就学状況に目を向ける本格的な社会事業にも、何がしかの影響を与えたものと思料される。また善治の時代が孕む社会問題や政治問題に鋭く切り込んでゆく記者として、社会運動家としての行動力には、良信の当時とその後における幅広い福祉対象への共感的・総合的实践と相通じるものがみられよう。

マハヤナ学園の創立趣意書（大正8年4月）の原本が淑徳大学アーカイブズに保管されている。本書には「創立顧問」として、著名な人物の名が列挙されており、その最後尾に肩書はないまま、「長谷川善治」の名が載っている。ただし、後の編纂物（二次資料）に掲載された創立趣意書にはその名は見えない。おそらく、その頃の善治の行動の波紋がそうさせたのであろう。たとえば、20年尼港事件に憤激し、水戸市常盤公園での「臨時招魂祭」前夜、田中義一陸軍大臣に「辞職勧告書」を渡すべく旅館に赴き、面会かなわず取次に渡した事。その翌年、水戸中学校同盟休校（ストライキ）事件に義侠心を募らせ檄文を撒布しようとしたことなどの行為があげられよう。しかし、良信の学園創立の前年および当年には、上記のごとく実業家として成功している。かつて苦学院を設立し貧家の子弟教育に情熱を燃やした善治のことだ。スラムの改善に立ちあがり、一段と組織的・本格的な社会事業をめざす弟良信の活動に少しでも力になればと、自らかかって出たものか、それとも良信の求めに応じてのことなのか、真相は不明ながら兄弟愛を伝えるものではある。

善治の生涯の中で、もっとも脚光を浴び、輝いていた時期は、そう長くはなかったが『萬朝報』の社長時代であろう。28年（41歳）暮から36年3月辞任するまでの7年余にわたって同社の経営を担った。彼が社長を引き受けたのは、同社の経営危機と多数の社員とその家族を路頭に迷わせてはならないといった、義侠心がそうさせたとしても、同紙を再生させるには経営陣の刷新や編集スタッフ等の充実が欠かせない。そこで善治が頼みの綱とした切り札こそ弟良信だったのであろう。良信の名が『萬朝報』に出てくるのは、同紙の29年4月2日号の「社告」で、最初の、「専務取締役長谷川善治」に次いで、「常務取締役 主筆 長谷川良信」の名が見え、No.2のポストである。主筆を務めていたのは31年9月までの2年半ほどに過ぎなかったが、兄善治の期待に応えるためにもかなり力を入れて取り組んでいたようである。良信は恩師・渡辺海旭のもとで浄土宗系の総合新聞『浄土教報』の編集等に従事した経験もあり、政治・社会・文化等、世事万般にわたって一通りの知見を有していたことに加えて、社長善治が「中産無産階級の機関紙」をめざしていたからこそ、多少無理をしてでも引き受けたのであろう。なお、良信在任中の紙面分析は今後の課題である。

萬朝報社は30（昭和5）年春、ロンドンで開催される国際連盟軍縮会議に特派員を派遣しており、良信はその代表として現地入りしている。『社会福祉法人・マハヤナ学園六十五年史 資料編』（1984年）によれば、良信は2月17日に出発し、6月1日に帰国したことがわかる。同上資料編には、「長谷川園長は、その

主筆せる萬朝報の軍縮応援団一行を主宰して、一行とともに3月11日にロンドンに渡り、大いに軍縮会議の裏面に活躍する処あった。会議の後は各国の社会事業施設や教育、宗教事情を視察し、……アメリカを経て6月1日に帰朝」と見えるなど、一定の役割と責務を果たし、且つ視察で得た収穫も大きかったようだ。

良信が主筆を退任した理由は、おそらく彼自身の本

務たる、大正大学教授としての研究・教育、マハヤナ学園諸事業、前号で言及した「全日本私設社会事業連盟」の設立など民間社会事業の組織化、巣鴨女子商業学校の設立等、激務の只中であって、兄からの懇請とはいえ、もはやこれ以上続けられないと判断したからであろう。

展示見学時のお願い

新型コロナウイルスの流行にともない、淑水記念館（1号館）4階の学祖展示室の見学は、展示室に「展示室見学時の注意事項」を掲示し、感染予防を行った上での見学のご協力をお願いしております。

また、3階の常設展「吉田久一展示室」はアーカイブ事務室へご予約をいただければ開室いたします。



淑徳大学アーカイブズ日誌（2020年6月～9月）

- | | |
|-------|---|
| 6月 3日 | 『せんかんニュース』第8号発行。 |
| 6月 4日 | 全国大学史資料協議会東日本部会第189回幹事会出席（オンライン）。〈桜井〉 |
| 6月 5日 | 同窓会事務室で聞き取り。〈大鷲〉 |
| 6月 5日 | 大念寺（茨城県稲敷市）調査打ち合わせ。〈大鷲〉 |
| 6月 9日 | 大念寺調査・写真撮影。〈大鷲〉 |
| 6月11日 | 同窓会事務室で聞き取り。〈大鷲〉 |
| 6月15日 | 千葉キャンパス学生サポートセンターより大学刊行物等移管。 |
| 6月16日 | 同窓会室三上浩部長より写真アルバム5冊借用。 |
| 6月19日 | 全国歴史資料保存利用機関連絡協議会調査・研究委員会へ新型コロナウイルスへの対応についてアンケート回答。 |
| 6月25日 | 『淑徳大学アーカイブズ・ニュース』第21号発行。 |
| 7月 2日 | 2020年度第1回淑徳大学自校教育推進委員会出席（オンライン）。〈桜井〉 |
| 7月 9日 | 淑徳大学長谷川仏教文化研究所より資料寄贈。 |
| 7月10日 | 総合福祉学部下山昭夫教授と「相談援助演習IK」受講生17名学祖展見学。 |
| 7月14日 | 元大学職員菅谷厚子氏より写真に関する情報提供。 |
| 7月18日 | 2020年度第1回千葉・関東地域社会福祉史研究会運営委員会出席（於墨田区西光寺）。〈桜井〉 |
| 7月18日 | 淑徳大学アーカイブズ長谷川匡俊所長へ聞き取り。〈大鷲〉 |
| 7月28日 | 淑徳大学第1期卒業生湯浅道夫氏より資料寄贈。 |
| 7月29日 | 社会事業史学会50周年記念大会ワーキングチーム第1回会議出席（オンライン）〈大鷲〉。 |
| 7月29日 | 長谷川匡俊氏より資料寄贈。 |
| 7月31日 | 学内より寄贈資料の複写依頼。 |
| 8月 3日 | 福田会育児院史研究会打ち合わせに出席（オンライン）。〈桜井〉 |

8月 8日	大巖寺宝物殿のビデオ撮影補助（8月19日とも）。〈大寫〉
8月14日	総合福祉学部前田寿紀教授担当「淑徳の福祉Ⅰ」受講学生5名学祖展見学。
8月20日	全国大学史資料協議会東日本部会第190回幹事会出席（オンライン）。〈桜井〉
8月31日	同窓会事務室で聞き取り。〈大寫〉
9月 2日	千葉ロッテマリーンズ淑徳大学スペシャルナイター開会セレモニー撮影。〈大寫〉
9月 3日	福祉新聞社記者横田一氏学祖展見学。
9月 7日	2020年度淑徳大学アーカイブズ運営委員会開催（於学園本部）。
9月 9日	福祉新聞社に学祖長谷川良信先生関係の写真利用の許可書を発行。

コロナ禍におけるアーカイブズの活動と対応について

4月、緊急事態宣言が発令となり、淑徳大学は勤務体制に在宅勤務を導入し、アーカイブズは交替でこの体制をとった。そのような中で、4月16日に所長より、この状況が長く続く可能性もあるので、今しかできないことを行うようにとの指示があり、今年度は資料整理に重点を置き、展示構想ほか今後の活動を練ることに時間を割いた。

当初はコロナの感染状況が不明な点や展示室の換気、消毒などへの対応から、4月より開催予定であった特別展を延期、秋の学園祭と同時開催の展示も見合わせる判断をしている。一方で発行物に関しては、感染拡大状況を見つつ、原本調査や聞き取りなどの活動を行い準備をすすめた。さらにアーカイブズのHPでは初めて動画を配信するなど、関係部署に協力いただき情報発信の方向性を模索しているところである。

現在、展示は申し込みをいただいたうえで、淑水記念館の学祖の展示コーナー（4階）・吉田久一展（常設、3階）を開催している。

大学が感染防止にどのように対応したかという点は、将来、重要な資料となると捉え、学内のメール等をアーカイブズへも共有することを所長名で各部署へ依頼し、現在進行形で協力いただいている。

（2020.12.7 文責 大寫）

淑徳大学アーカイブズは、大学及び大乘淑徳学園に関する資料の寄贈をお待ちしています。

- 1 大学及び学園が発行した新聞・雑誌・広報誌・年報・報告書等。
- 2 学生時代の写真・講義ノート・教科書・手帳・日記・記念品・記章・各種書類等。
- 3 上記のほか学生時代に使用していたもの。
- 4 大学及び学園のサークルや研究会の活動を示すもの。
- 5 学祖・長谷川良信にかかわる資料。

また、大学及び学園の各部署や学部学科、機関で保存期間の満了した文書、あるいは廃棄の対象となる文書が発生した場合は、大学アーカイブズまでご連絡ください。



淑徳大学
アーカイブズ・ニュース 第22号
NEWSLETTER of
SHUKUTOKU UNIVERSITY ARCHIVES

発行日：2021年（令和3）1月15日

編集・発行：淑徳大学アーカイブズ

〒260-8701 千葉県千葉市中央区大巖寺町200

TEL 043-265-7526（直通）

e-mail：archives@soc.shukutoku.ac.jp

HP：https://www.shukutoku.ac.jp/shisetsu/archives/